医療ルネサンス　№7814　骨折治療の今　1/5

背骨 ステント活用し復元

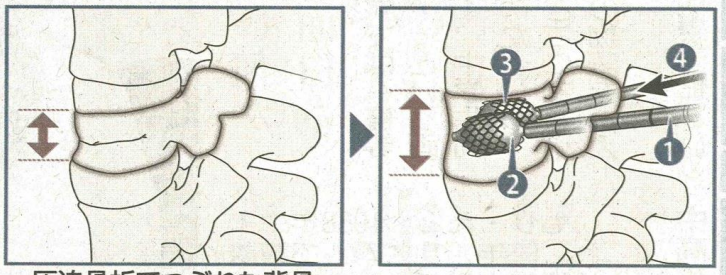
千葉県に住む石井茂子さん(78)は昨年10月、雨上がりの坂道で足を滑らせ、背中をしたたかに打った。

当時は湿布して痛みを紛らわせたが、今年春頃から、背中から腰に激痛が走るようになった。朝、体を起こすのも一苦労、着替えに20分もかかった。

国際医療福祉大成田病院(千葉県成田市)を受診すると、MRI(磁気共鳴画像)検査で、背骨が1か所潰れていることがわかった。潰れた骨には横に割れ目が入り、カスタネットのように開閉する状態になっていた。

診察に当たった整形外科主任教授の石井賢さんは「転倒した際に、骨粗しょう症でもろくなっていた背骨が圧迫骨折し、亀裂の部分がくっつかないまま固まったのでしょう」と説明する。半年の間に、亀裂のある骨が体を動かした際に強くぐらつくようになり、神経を圧迫して激痛を招いていると考えられた。

ステントを活用した圧迫骨折の新治療



圧迫骨折でつぶれた背骨

1. つぶれた背骨の中に細い管を通す
2. バルーンを膨らませ骨を元の形に近づける
3. ステントを挿入
4. 広げた空間に骨セメントを注入して固める

そこで、ステント(金網の筒)を活用して背骨を復元する最新治療が提案された。

背中側に2か所穴を開け、直径約5ミリの細い管2本を潰れた骨の中まで挿入し、バルーン(風船)を膨らませ、ステントも開く。潰れた骨をバルーンで広げ、ステントの支えで確保した空間に骨セメントを注入し、背骨を理想的な高さに戻す。一連の作業は、エックス線画像で位置を確認しながら行う。

コルセットなどの装具を用いて固定する治療を行っても骨がくっつかず、痛みが引かない場合が対象で、昨年5月に保険適用になった。

バルーンを使って骨セメントを注入する治療自体は10年以上前から行われてきた。従来の方法では、セメント注入のためにバルーンを引き抜く際、一度広げた空間が狭まってしまうことがあった。ステントを使えば、より確実に空間が確保でき、骨を元の高さに近づけやすくなる。

注入したセメントが背骨の外に漏れて神経を圧迫するリスクもあるが、「ステントの活用によりセメントが注入しやすくなることで、そうしたミスの減少も期待される」(主治医の石井さん)という。

茂子さんは5月に、この手術を受け、その夜には背中の痛みが引いた。10日ほどで退院。「この治療が受けられてラッキーだった」と話す。

ただし、骨粗しょう症の人の場合、セメントが注入された骨の強度が増す分、その上下のもろい骨に負担が集中し、新たに圧迫骨折が起きるケースもある。二次的な圧迫骨折を予防するために、茂子さんは骨を強くする薬の注射などの治療を続けている。

(このシリーズは全5回)